

---

# ラブレター零・ZA・音編

零・ZA・音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラブレター零・ZA・音編

### 【Zコード】

Z5182A

### 【作者名】

零・ZA・音

### 【あらすじ】

今日こそはー!と、意気込んでラブレターを出した俊哉。しかし、どこでどう間違ったのか…そのラブレターをもつてるのは、俺の苦手な女の子…静香。はてさてどうなるのかー俊哉の恋の行方は!?

## (前書き)

同じ設定で書いつつ第一弾のお話です。「グループ小説」で共同制作の方の小説が読めますので是非、読んでみてください。

俺は一人、教室に残り、考えていた。どうしてこうなったか…。  
なんである時、言えなかつたのか…。それが今でも俺の頭の中を巡  
つていた…。

「何してゐるの?…帰るよ。俊哉」

俺を呼ぶ声で我に返る。見れば、ちよつとじり立腹な様子の静香が立  
つていた。

「ああ…今行くよ」  
「遅いよ…まつたくとひいんだから」  
「お前がせつかちなだけだ」  
「私は、普通でえ~す」  
舌を思いつきり出して、可愛くおどけてみせる静香。付き合い始め  
たばかりの俺の彼女だ。  
ただし、俺が好きな人…ではない。

間違えてラブレターが渡つてしまつた相手である…。

\* \* \* \* \*

毎日、今日「そはー」と…決めていたが、いざ行動に移すと緊張する  
ものだ。

俺の手の中には、思いを籠めたラブレターがある。今日このは、これを渡して告白するんだ。

「よしひー…行くか

俺は気合を入れて目的の場所に向かつて行った。

「えつと…確かにここだよな

目的の場所 それは下駄箱。オーソドックスに俺は、ラブレターをここに入れる事にした。

朝一番、まだ誰もいないこの時間を狙つてきたのだ。…失敗する訳にはいかない。

念入りに確認して、俺は下駄箱を開けてラブレターを入れた。

「どうか…思いが伝わりますように…」

下駄箱を拵んで俺はその場を後にした。後は野となれ…山となれ…。神様に任せて教室を目指した。

まだ誰もいない教室は静かで何だか寂しい気がした。誰か早くこないかなと思っていたら、扉の開く音がした。

「…あれ？…今日は早いんだね。俊哉君」

「ふえ…あつ、お、おおお、おはよう！沙紀さん」

「ふふふ…どうしたの？何か今日は変だよ」

口元を押されて笑っている沙紀さん。とても優雅で可憐だ…。

優しく微笑む顔はまるで天使のようで…俺の全てを射抜いていく力を持つていた。

「今日は日直だから、私が一番だと思ったのに…まさか先に来てる人がいるとは思わなかつたよ」

「えつ…ああ、そうなんだ」

俺は、平静を装いつつ…内心かなりびびっていた。もし、もう少し遅かつたら鉢合わせていた事になる。

なんで、日直の事に気づかなかつたんだ…俺は…

「そういえば…今日は静香は一緒じゃないの？」

「あいつは多分、まだ寝てるんじゃないかな」

「そつが、まだ早いものね…でも、起きれるのかな？」

時計を見ながら聞いてくる沙紀さん。俺も腕時計を見たが、多分間に合わないだろ…。

あいつの寝坊は筋金入りだから…。昔から変わらない事だ。

「だけどうらやましいな…幼なじみつて」

「そとかな…あいつはうるさいだけだよ。名前が合つてない」

「確かに静香つて言つたけど…静かじやないけどね」

「そうだよ」

そう言つて俺達は笑い合つていた。凄く自然でいい雰囲気だ…今なら告白出来そうだ…つてそう言えば…！

俺、沙紀さんの下駄箱にラブレターを入れたんだ。今頃になつて緊張してきた。

「どうしたの？…俊哉君」

「えつ…いや、なんでもない」

「そお？…ならいいけど…」

俺と話しながら日直の仕事をこなしていく沙紀さん。俺はラブレターの事が気になり、ソワソワしていた。

沙紀さんの姿を確認しながら俺は考えていた。沙紀さんは何も言わない…まだ見てないか？

ラブレターの存在がどうなつたのか…沙紀さんの思ひはどうなのか…今すぐにでも聞きたい衝動を押さえていた。

今ここで聞いて駄目だつたら怖い。なら…もつ少しこの時間の大切にしたい。

この一人っきりの時間を堪能したい！楽しい時間をもう少し長く味わいたい…つて思う俺つてかなりの臆病者？

等と考えていたら、いつの間にやらクラスメイト達で周りがガヤガヤとしていた。

時間も後少しでHRの始まる。都合よくチャイムが鳴り、これまた都合よく先生が入ってくる。

「お~りあ…席に着けえ」

やる気の無い先生の声で始まるHR。出席を取り始め…次々と名前を呼ばれていく。

俺が呼ばれ、沙紀さんが呼ばれて…そろそろあいつの番だと思つていた、その時…

「間に合つたあ…はあはあ…」

静寂を打ち破る音と共に、現れたのは遅刻常習犯の静香。短く切った髪が汗で額に張り付いている。

荒い息を吐きながら、教室内を見渡している。しかし、静まりかえった教室に先生の無情な一言が…。

「…遅刻」

「嘘つ…セーフでしょ…」

「ギリギリアウトだ」

「そんなんあ~」

その場に力なくへナへナと座り込む静香。何とも哀れな感じだ。

「早く席につけ…」

「はあ~い…」

先生に言われてガクッと、肩を落として歩いてくる静香。足取りが重たいようだ。

「よう…また遅刻か」

「そうなのよ…つて、なんで俊哉がいるの…あつ…今日起こしこ来てくれなかつたでしょ…」

「つるさ~ぞ…静かにしろ」

ついには怒られる静香。舌を出し可憐くおどけて席に着く…つて俺の後ろだけど…。

そんな感じで始まる授業…しかし、後ろでは何や~りつるや~こ静香。

本当に落ち着きの無い奴だ。

昔から無意味に元気で、よく俺は泣かされてたつけ……。猪突猛進爆裂娘……一言で言えば、バカ。詳しく言えば……馬鹿。

それだから、今でもこいつだけは苦手だ……色々な意味で……。

そういひじてゐる内に昼休み。俺は昼飯を……

「一緒に食べよつよ！俊哉」

食べに行ひつとして捕まつた。ガツチリと捕獲されたとも言ひが……。

「俺は、飯がないだが……」

「それなら大丈夫 朝、コンビニで買つてきたから」

「遅刻した奴が言つ事ぢやないぞ……静香」

「いいから、気にしない！ほらつ」

そう言つて手渡されたのは……パン。しかもクリームパンとジャムパン……そして、アンパン。

俺に病氣にでもなれと言つのか……この組み合はせは。トドメは極甘いちじり牛乳……もつ何も言えない。

しかし……それと同じものを目の前で、平然と食べている静香。

「ん～～！やっぱり、ジャムパンはおいしいね」

「よかつたな……」

「うん！」

力なく返事をした俺に、満面の笑みで返す静香。俺とは、正反対だ

…どうして好みまで反対なんだろ？

静香は甘党…俺は辛党。」いつも合わないとは、珍しい事だ。

「ふおふおろへ…ふおふえふあ…」

「食べてから喋れよ…まったく、少しは落ち着いたらどうだ」

「…………うぐつ…ふはあ…とこりで俊哉…」

「まったく聞いたやあない…なんだ？」

「さつきの休み時間、沙紀から手紙もらつた

「…………はあ？」

俺は何とも間抜けな返事を返してしまつた。静香が言つた意味が分からない…誰が何をくれたつて？

そんな俺を他所に、鞄から何かを出してくる静香。それはとても見えのあるもの…。

「これ…ラブレターだよね」

「そうだろ？…不幸の手紙には見えない」

「だよね…どうしようかな」

「何が…」

何かを悩んでいる静香。俺はそれ以上に困惑して悩んでいた。なんで静香が俺の書いたラブレター持つてるんだ！

それに、沙紀さんが静香に渡したつてどういう事だ…。訳が分からなくなつて頭を抱えてしまつた。

「困つたなあ…」

「何がだよ…」

お前以上に、俺の方が困つているとは口が裂けても言えない。

「私…好きな人いるし…」

「…………はあ？」

今度は驚いた。今…何言つた？「…に好きな人がいるだと…それは初耳だ。

「でも…行かないと失礼だよね」

「…それとこれと…何の関係があるんだ？」

「えつ？…だつて、このラブレター…私宛に来たものだもん」

「…………はいっ？」

「だ・か・ら…これは私に来たラブレターなの！』朝、下駄箱に間違えて入つてたの』って沙紀がくれたの」

「つ……ちょっと見せろ…」

「あつ…俊哉」

俺は静香の手からラブレターをもぎ取り、確認した。確かに俺の字だ…間違いない。

だけど、これは沙紀さん宛てに書いたもので…

「ああ————！」

「ど、どどど、どつしたの？俊哉」

驚いている静香を無視して俺は震えていた。なんてこつた…俺、やつてはいけない事をやつてしまつた。

ラブレターを書くのは、初めてで緊張していた俺は、慣れる為に色々と書いてみた。

その時に、名前がないと真実味がないので…静香の名前を書いたんだ。こいつの名前なら恥かしくないし…と思つて。

それを間違えて送つてしまつたんだ！だから、中を見た沙紀さんは静香に渡したんだ。

俺の大馬鹿野郎！…せめてもの救いは、俺の名前を書いていない事だろう。

「どうしたの？ねえ…俊哉」

「えつ…いや…別になんでもない」

なるべく平静をとりつつ、俺は考えていた。どうする…こいつからこれを奪つた…それともここで本当の事を話すか…。

どつちしろ、俺が血を見るのは明らかだ…こいつには勝てないから…昔から、一度も喧嘩で勝てた試しがない。

「よしつ…決めた！私、行つて来る」

「…はあ？」

「だから、このラブレターくれた人に会つてくる。そして断つてく  
る…好きな人がいるって」

「いや…それは…あのなあ…」

「と…言つ訳で、俊哉…着いて来て」

「はあ…何でだ?」

俺を指差しながら言う静香に、間抜けな顔で返事を返した。ラブレ  
ターを書いたのは俺だ。

なんで、ラブレター書いた張本人が、着いて行かなきやならないだ。  
「私がもし、襲われたらどうするの!」

「俺は、相手に同情する…」

「何ですつて!いいから着いてくるの!…分かった?これは命令…絶  
対服従のね」

「はあ…おかしいだろ。絶対に何かおかしいだろ…」

目の前で鼻息荒く、俺を見据えている静香。やつぱり…俺はこいつ  
が苦手だ。

頭が痛い…。俺は痛む頭を押さえて残りのパンを食べていた。味な  
んか分かつたもんじやない…。

「遅い!」

「…落ち着けよ」

俺達は、ラブレターに書かれた場所にやつてきていた。俺が書いた

んだけど…。

屋上には誰もいない…俺達一人以外は…。

「今まで待たせるのよ…まつたく…」

「……はあ～」

今まで待つても来ませんよ…とは口が裂けても言えません。現に書いた張本人は横にいるのだから…。

かなり、ご立腹の様子の静香。顔が物凄く怖い…今更、本当の事言えない。そんな雰囲気じゃないし…。

「きい～！出て来い畜生あ！」

「おいっ…落ち着けつて…」

「うきつ～！」

「お前は猿か…」

暴れ出した静香を何とか押さえつけて、思案している俺。どうしかが…このまま待っているのも何だし…

「帰るか？」

「いやつ…」

即答で返された。」うなれば、絶対に引かないので静香の性格。この際、俺が犠牲になるか…。

「ああ～、もう…」

「あんな…静香」

「何…？俊哉」

「あのラブレター…俺が書いたんだ」

「えつ…」

物凄く間抜けな顔をしている静香。しうがない…本当の事を話して一発殴られよう。

「実はな…あれは…」

「本当に俊哉が書いたの？」

「あんなあ…よく見てみろ。俺の字だうが…」

「……あつ…本當だ。俊哉の字だ」

ラブレターを読みながらがフムフムと頷いている静香。

「それでだな……その手紙は……」

「うれしい……」

「……はあ？」

「嬉しい……俊哉、私の事好きだったの？」

震える声で返事をして、手紙から顔を上げた静香の顔。それは今まで見た事のない顔をしていた。

女の子……それも恋する女の子の顔と、でも言えぱいいのか……頬を染めて瞳には薄つすらと涙を溜めていた。

「いや……だから、それは……」

「私も……俊哉の事好きだよ」

静香が俺を見詰めている。その瞳は真剣で……でも、それでいて優しく揺れていた。

好き……俺が今まで言いたくても言えなかつた言葉。それを静香は躊躇う事なく言つていて。

「……じゃあ……お前が好きな奴つて……俺？」

無言で頷く静香。一粒……零となり落ちる涙が綺麗に輝いていた。

「ずっと……ずっと好きだったの」

「えつと……あの……」

そうして、俺を見詰める瞳に俺は……言葉を失つていた。それは何とも言えない……一種の魔法みたいなもの……。

俺は、沙紀さんが好きだ。だけど、静香にここまで言わせておいて、今更、「違うんだ。嘘でした」とは、とてもじゃないが言えない。殺される……どうしたらいいんだよ。このままじゃ……俺、静香と付き合つ事になるのか？

「俊哉……大好き」

その一言は最早……最終通告だった。俺は、断る勇気も持つていない

みたいだ。

ただ…その場の雰囲気に流されて頷いていた。俺って、本当に駄目な奴だ。

静香が微笑む…それを見て俺も笑う。顔が引き攣っているのは…ご愛嬌だ。

\* \* \* \* \*

「早く帰ろうよ！俊哉」

「分かったって…」

教室の扉の前…俺を急かす静香はどこか楽しそうだ。ただ、一緒に

帰るだけ…それは今まで同じ。

理由を聞いたら静香に『私達の関係が変わったからよ』と恥ずかしそうに言わされたしました。

俺はこうなった事に、何とも言えない感情をこめて…ため息をついた。

「俊哉…」

そんな俺の心情を知らずに、微笑む静香は夕日に照らされて、とても幻想的で綺麗に見えた。

いつまでこの関係は続くのか…続けられるのか。俺たちはこれからどうなるのか…それは分からぬ。

でも…楽しそうな静香を見ていると…何も言えない。俺の気持ちも

知らないで…。

「さて…帰るか…」

俺は苦笑しながら、静香のそばに歩いていった…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5182a/>

---

ラブレター零・ZA・音編

2010年10月26日02時59分発行